
鏡の中から君の背を押す

古川まこと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鏡の中から君の背を押す

【Nコード】

N3405B

【作者名】

古川まこと

【あらすじ】

ある日突然、ある場所で明希が出会ったのは、死んだ筈の賢太だった――

三面鏡（前書き）

最後までお付き合い頂けるとうれしいです。

三面鏡

「うわっ、ぶっさいくな顔！」

そう鏡に言われたのは今朝の話だ。

朝、三面鏡にいつも通り向かい、いつも通りのしてるかしてないか判りずらい、曖昧な化粧をしようと、腰を下ろした時。三面鏡の真ん中の鏡にそいつは居た。

鏡の中、本来なら第二の私が座っているはずの場所にそいつが座っていたのだ。

茫然とする私を尻目に、起きたばかりの私の顔を、特等席でじつくり見て居た。

私は始め、寝ぼけているのだろうと思った。なにしろ、半年位前に死んだはずの友人が鏡の中で自分を見つめていたのだから。こんなこと、常識的には絶対にない事だと知っている。

なのにそいつと来たら、私の開ききって無いどこか虚ろな目と会うと、「うわっ、ぶっさいく！」などと、驚いたアクションをオ―バーに取り言うのだ。

「・・・」

「ん？どうしたんだ？」

不思議そうな賢太の声。それを無視して私は立ち上がる。視線はまっすぐ前を見たまま、固まっていて動かない。現実を受け止められていない私はまっすぐに洗面台へと向かった。というより、これを“現実”という言葉で表してはいけないと、私の中の私が強く訴えかけていた。

冷たい水が私の顔を叩き叱咤する。「何をしてるの、早く起きなさい！」と、言葉にするならそんな感じだろう。ばしゃばしゃと大ざっぱに顔を洗ったあとは、ついでに歯を磨き、改めて三面鏡と向かい合う。

もうそこには自分の写った姿しかないはずだ。私は鏡に向かいあう前、瞼をゆっくりと閉じた。そして、鏡の前に置かれた座敷に腰を下ろし、正面に自分の座る姿をイメージすると、ゆっくりと瞼を持ち上げる。

（大丈夫。もう目は醒めた。頭も冷めた。なににもなかった。なににもいなかった・・・）

「お、覚めた？」

そいつはまだ居た。

鏡の中で三面鏡の台に肘をつき、ひらひらとこちらに手まで振っていた。

「な、っ、」

「オハヨ」

私の顔から血の気が引いた。

「何であんたがここにいんのよ！？」

「ハハハ、びっくりしてる」

腹を抱えて笑う姿は生前のままだった。そんな姿は余計に私の頭を混乱させた。

「いや、意味が判んない！あたしまだ寝てる！絶対そう！これは夢！！夢なんだから！！」

私は頭を抱えながら、ぶんぶんと首を振った。そんな姿を、鏡の中のそいつは楽しそうに眺めて居た。まるで悪戯に成功した悪ガキのようだ。

「首落ちちゃうよー」

呑気に顎を台の上に乗せ、まるで人事のように混乱する私を笑う。「あんた解ってんの！？こんな事絶対あっちゃいけないんだから！！」

「良いよ、俺楽しいし」

知るか！と、私の中で私が叫んだ。

おかしいのだ。なぜこいつがここにいるのか。幽霊という存在を今なら信じられるのかもしれないが、こいつを見てみるとそれとも何か違う気がする。そして、こいつが、もし、万が一、“幽霊”という存在だとしても、私の前に現れた理由がわからない。心当たりがないと言えばうそになる。葬式にはいかなかったし、一度も線香をあげた事もなかった。こいつのために涙を流した覚えもない。借りた320円も返さずじまいだったし、高校時代に流行った懐かしいCDも、借りたままいつの間にか私のものになっていた。思い出してみれば、あれもこれも、“恨み”や“未練”というものを十分に引き出させるような軽罪が私にはあった。

そうか、こいつはそれらもろもろの仕返しをしに現れたのか。と、どこか納得しかけものの、やはり、私の中にある冷静な何かが、「そんなはずがないだろう」と、軽くお咎めをくれてくれる。

納得できる理由が今の私に見つけられるはずもなかったのだ。

私はどうしたらいいかわからないまま、寝ぐせでどんちゃん騒ぎの髪の毛を、更に両手でぐしゃぐしゃとかき乱した。

「もう！わけがわからない！！」

きつ、と鏡をにらみつけ、説明を問い詰める私へ、健太は今の私では決して頭が回らないであろう素晴らしい一言を暮れてくれたのだ。

「そんな事より、大丈夫か？」

私の時間が一瞬静止した。だが、鏡の中の賢太が指差す方を見て、即座に現実に戻されたのだった。

「は！？」

指差されたのは壁時計。見慣れたその丸い枠の中には7・45の時を刻む針が二本、止まることを知らずチクタクと時を刻んでいた。

やばい。あと15分しかない。

私の頭からはさらに血の気が引き、きつと鏡の中のやつからは真っ青な私の顔が見えた事だろうと思う。

電車に乗り遅れる。咄嗟にそうおもった私は即座にはね上がり、
ばたばたと、中断となっていた朝の支度を再開し始めたのだった。
「もっと早く言いなさいよ！」

慌てながらも責める私に、健太は親指を立ててニツと笑った。

「大丈夫！お前なら行ける！！」

お前はどこまで能天気なんだ！

この時ばかりは、いくら大切な三面鏡とはいえ叩き割ってやろう
かと本気で思った。

電車

「間に、合った……」

ぜえぜえと息を切らせながら、私はあいてる席に座った。車内は込み合っても空き過ぎてもない、そこその人数だった。皆、それぞれがそれぞれのしたい事をしていて、駆け込み乗車の私なんかにはまったく興味がなさそうだった。熟睡してる人は勿論、携帯をいじったり、新聞を読んでいた。ゲームを持ち歩いて自分の降りる駅までやっている奴もたまにいる。そう言う人間を見るたびに、私は「なんて暇なんだろう」と、呆れるのだ。だが、今の自分の社会的な立ち位置を思い出せば、自分こそ何にもしていなく、ゲームをしている人間をああだこうだと言う権利はないと虚しくなる。悪循環だ。

どうでも良い。

私は何もかも考えるのをやめて、ドア付近にあいている席を探した。もちろんそれはすぐに見つかる。この人数なら当り前か。みんな隣の人間から人一人分の幅をとり座っているのだから、私はその幅に入り込めばいいだけのことなのだ。

ためらいなく席に腰を下ろし、まだ少し荒れた呼吸を整える。久々に走ったせいか、額や鼻の頭には結構な汗が溜まっていた。私は鞆からハンカチを取り出し、ついでに手鏡も探り出した。ハンカチは昨日のものだった。今朝はどたばたしていたので、新しいのと入れ替えるのを忘れていた。まあどうせ、私のハンカチなんか気に気を使うような人間はいないだろうから、昨日のものだとばれることもないだろう。

化粧も薄い事だし、取れたところであまり変わりもない。私は適当に汗をぬぐうと、いつも持ち歩いている、100均でお買い上げの鏡を開いた。別に体裁を気にしているわけではないが、最低限、マナーとしては必要だろうと思った。

鏡を開き、自分を見つめる。

いや、自分では無い。そこにいたのは――

「おい！そこ優先せ」

ぴしゃり

私は鏡を閉じた。

――賢太だった。

私はもう、鏡の中に自分の姿を映し出す事もかなわないのだろうか。おかしい不安が頭をよぎった。そして、落ち着いた動作で手鏡をカバンの中に戻すと、自身の内に妙に冷静な自分がいて、私は呆れたように半眼した。

なんでお前がここに居るんだ。

本人に訊かず、頭の中、その問いばかりを自分に投げかけていた。鏡を閉じた時の“ぴしゃり”という音がそんなに大きかったのだろうか。隣に座るサラリーマンが私を訝しげに見ていた。私はごまかすように視線を下にやり、着信が一切ない携帯を取り出していきり始めた。

（早く駅につけばいいのに）

そんな我儘を声にしないでつぶやいた。

倉庫

「何であんたがここに居んのよ！」

私は職場に着くと、真先に人の出入りしない倉庫へ向かった。

「何怒ってんだよ？」

賢太は事の現状をまったくわかってない様子だった。死んだ人間が鏡に出てきちゃいました。なんて、普通では絶対にありえないことなのに。

「わかってる？ あんたは死んだの。ここにいちやいけない」

「なんでいけないんだ？ 誰が決めた？」

分かれようともしていかないのだろうか。私には賢太が、事を深刻にとらえようとしていないように見えた。頭にかっ、と血が上り、私は声を張り上げた。

「このわからず屋！！」

手鏡に向かい怒鳴り散らす姿はどれ程滑稽な物なのだろう。私は頭の隅でそう。

「ばか！ あほ！ 間抜け！ 頭でっかち！」

まるで子供だった。情けないというほか、言葉が思い浮かばない。「なにいつてんのお前」

この時ばかりは賢太の方が落ち着いていた。だれがどう見ても、今の私は駄々をこねて喚き散らしているだけの子供だ。いけないいけない、という言葉ばかりを繰り返し、なぜいけないのかを、自分でも全くわかっていなかった。ただ、普通じゃありえないから“いけない”。みんながこうじゃないから“いけない”。そればかりで、まるで「友達みんなコレもってるんだよ」と言っ、おもちゃを親にせがんでいる子供と一緒にだった。みんながみんなが、ばかりで、なぜみんながそうしているのか、そうなったのかを考えようともしないのだ。

あまりにも情けない自分。

不満をぶちまけてばかりで、全部他人のせい。そんな自分が嫌になり、私は口を閉じた。

賢太は何も言わない。ただ、静かになった私へ、問いかけるような視線を投げかけてきた。

「…なんで」

私は、どこかむすつとしている自分を感じた。やっぱり子供だ。事をうまく運べない自分に腹が立って、嫌気がさして、それでいてどうしたらいいかわからなくて、駄々をこねていて、喚き散らして何をどうしたらいいかわからなくなった結果がこれだ。

ああ、なんて駄目なんだろう、私。

暗く湿った倉庫内。なぜだかよく見える鏡の中の賢太へ私は問うた。

「なんで、あんたはここにいるの？」

真面目だったと思う。視線はまっすぐに賢太を見ていて、賢太も多分私を見ていた。お調子もので、いつも軽口しか吐かなくて、落ち着きがなくて。どう考えても私より子供なのはこいつなのに。なのに、今ばかりはなぜかこいつの方が落ち着いていた。

普通に考えてみれば当たり前だ。なにしろ、こいつが一番よく考えないといけない事なのだから。

死んだ本人が、一番混乱しているはずなのだから。

これは、“私にとって”よりも“賢太にとって”の方が幾段も重大な問題なのだ。

「知らね」

鏡の中の瞳が、やけに冷めて感じた。

知るかよ。俺が聞きたい。何で俺はここにいるんだ。なんでお前なんかの場所でなきゃならなかったんだ。なんでほかの奴じゃなかったんだ。なんで、こんな負け犬のところに――

別に本人が言ったわけではない。ただ、なぜだか、自分の脳内で、賢太の声でそう言われたかのような錯覚に陥った。

ばとん…

私は鏡を閉じた。

瞬間「おい！」と慌てた声が聞えた。

——こんな、ダメな奴の所に……

「……………」

虚しさが押し寄せる。

気づけば鏡を持つ手が震えていた。それは深呼吸一つですぐに止み、またいつもと変わらない自分がそこにいた。

ロッカールーム

もう、戻らなければ。感傷に浸る間もなく、私の頭は習慣的にそう思った。こんな時でもバイトの事へ頭が回るなんて、なんてずれた人間なんだろうと自分のことながらそう思った。

私の手が倉庫の取手に触れる。それを思い切って横へと引いた。

——がつ

「?…あ、れ」

開かない。

なんでだろう。目の当たりにした事実を受け入れることができなくて、私はもう一度腕に力を込める。

——ガッ

やはりだ。開かない。外に何か突っかかり棒のようなものもあるのだろうか。いや、もしかしたら押すタイプのドアだったのかもしれない。

入ってきた時は明らかに引き戸だったそれを、私は忘れたふりをして押してみた。もちろん開くはずもない。私はあきらめきれずにさまざまな方向へドアを引っ張った。

手前へ引いたり。車庫のようへ上へ押し上げるたり。自動ドアのつもりなのか、手前に足をタンッと突き出し、戸が反応してくれるのを待ってみたり。

(まさか内側からは開けられない仕組みだったとか!?)

そんな事を考えてみるも、こんなそこらによくあるような倉庫が、自動ロックという高機能を持つとも思えなかった。

私は、はあはあ言いながら戸を押したり引いたり蹴ったりした。だが倉庫の戸は虚しさに拍車をかけるような音を立てるばかりで、まったくその口を開こうとはしなかった。重い扉は、その内部に私という食物を閉じ込めて完璧に口を閉ざしてしまったのだ。まさかこのまま消化されやしないだろうか。そんな馬鹿な話…と思う反面、

あったらどうしようという不安が小さく首をもたげる。

まったく微動だにしない扉を前に、私の中の不安と苛立ちがつもりにつまり溢れだそうとしていた。ネズミの駆ける音もしないその場所で、私という存在だけが音の発信源となる。いまいるこの場所の「空気」「雰囲気」といったものは、今そこにいる唯一の生き物である私にゆだねられていたのだ。きっと、今私が笑っていれば、どんなに暗い倉庫の中でも「楽しい場所」という代名詞がつけられたかもしれない。だが、「唯一の生き物」「その場の空気を握る存在」である私は、どうしようともそんな気分にはなれなかった。

「何なのよ!」

大声を出すと、倉庫の中に自分の声がわんわんと響いく。その場の「雰囲気」は一気に急降下を始めた。もう光が差し込むことが無いかのような、絶望の糸が張り詰める。

鼓膜に痛い自分の声の反響音に耳を抑えて、私は自分を落ち着かせようと深く息を吐いた。

「まったく、何なのよ」

出てくる言葉も、心で思うところもそればかりだった。

戸に寄り掛かり俯くと、ひやりと冷たい地面が見えた。

ずっとここに閉じ込められたままなのだろうか。それは嫌だ。だが本当にそうになったら？

不安が私に尋ねる。

いやだ。私はすかさずそう答えた。そんなの嫌だ。絶対嫌だ、と。仕方が無い事だ。ずっとこんな場所に一人でいるなんて、だれが尋ねられてもそう思うはずだ。冷たいし、暗いし、じめじめしているようで乾燥しているようでもある。テレビもラジオも、ミュージックコンポもない。普段はありがたいはずの、雨風を防いでくれる屋根も、今では果てしなく邪魔な存在となっていた。空も見えないので、ここで暮らすとしたら私には昼夜のない人生が待っているのだろう。

…いやだ。

まただ、わがままな私が首を持ち上げる。いつもはそんなものい
もしないのに。今日はいろんな私が顔を出しては帰って行く。普段
は怒鳴ったり、泣いたり、駄々をこねたりなどしないのに。きつと
あいつのせいだ。

「帰りたい。帰りたいよ・・・」

膝を抱えて、私の体は小さく小さく丸まった。顔は自然と膝に埋
もれ、自分がどんな顔をしているのか、自分ですらわからない。
きつと情けない顔には違いなのだろうが。

そう思うといやな思考はいくらでも出てきた。

どうせ、私というバイト一人が消えたところで、困る人間は一人
も居やしない。

暗いもの、黒いものが、自分という存在の中からにじみ出る。そ
れは倉庫の暗闇へと溶け、濃厚な負の空気を作りだしていた。

自分の存在が何なのか。生きてる事に意味はあるのか。自分の
必要性。この社会の必要性。生きてることの必要性。死についての
思想。

すべてがなんとも思えなかった。どうでも良い自分がいた。

そう言えば、なんでこんな生きる希望もないのに自分は生きてき
たのだろう。

簡単だ。死にたくなかったから、ただそれだけではないか。

じゃあ、生きたいのかと尋ねられると、その理由も見つからず素
直に首を縦に振ることはできなかった。別に、誰に訊かれたという
わけでもないのだが。

いつの間にかいつもの自分を取り戻しつつあった。泣いたり、怒
ったり、怒鳴ったり、笑ったり。「興奮」というのだろうか。そん
な、通常では存在しているかどうか疑問だった喜怒哀楽の波は、
引き潮へと向かってく。それと同時に、私は負の空気で埋め尽くさ
れようとしているこの場所を受け入れようとしていた。悲しいこと
かもしれないが、今の自分にはこの暗く冷たい倉庫という箱が似

合いな気がしたのだ。

「きゃっ」

後ろにがくりと身が揺れる。倉庫が口を開いたのだ。

私はいきなり動いた戸に反応しきれず、バランスを崩してそのまま後ろに倒れそうになった。

「大丈夫？」

上を見ればどこか見覚えのあるおばさんの顔。

ああ。と私は一旦動きを止め、そして落着きを取り戻す。目の前に現れたおばさんをじっくり観察してみれば、そのおばさんの正体を見破ることができる沢山の情報がありあふれていた。

見慣れた服装。淡い緑の作業着に、同じ色の三角巾。白いゴム製の長靴。右手に持てれたモップ。

掃除のおばさんではないか。

私のバランスの崩れた体は掃除のおばさんが受け止めてくれた。呆然とする私を、同じように茫然と見下ろすおばさん。

「すみ、あ、ありがとうございます」

私は彼女に支えられたまま辺りに目をやる。

どうやらここは掃除用具の溜め置き場だったらしい。よく見たら積み上げられた段ボールには、洗剤の名前などが書かれているではないか。

自分で入っておきながら、そんなことにも気付かなかった私は、自分自身に少々幻滅をした。

「山田さん、遅刻よ！」

早足の私にぴしゃりとした声が飛ぶ。

レジ部責任者の菅原さんだ。彼女の注意を受け、私は亀のように首をすくめた。なにしろ彼女にはなかなかの迫力がある。

「すみません」

素直に謝る私へ、彼女は表情を和らげた。

「珍しい事だし、そんなしつこく言うつもりは無いけど、無理するなら言ってちょうだい。この頃の皺寄せはあなたばかりに回ってるんだから。今月の休みも呼び出しちゃったし、」

心から申し訳ないと思っている言葉だった。確かに最近の私のシフトときたら、決められた既定の時間を越している。月に100時間。普通は一人のバイトをこんなにも働かせてはいけなはずなのだ。

「大丈夫ですから」

嘘ではない。今の私と来たら、バイト以外する事が無いのだし。

「そう？休みが欲しかったらいつでもいいってね。学生の子なんかは遊ぶ時間欲しさでいきなり『今日休みます』とかいつてくるんだから。困るったらないわ」

「ははは、そうですか。はい。じゃあ休みたくなった時はお願いします」

四十代半ばの彼女は、たまに母親のような顔を見せる。バイトの中には彼女を嫌う者もいるが、私には理解不能だ。

だいたい、若いバイトは自分の失態を注意されている事を判っていないのだ。注意されるとすぐにバイト仲間に陰口し、口うるさいばあだの何様のつもりだだのと言うのだ。まったく。なに様はどっちだ、とたまに思う。

でも、結局はそんな些細なこと、自分はなんとも思っていないのだろう。どうでも良いという、色のない感情。

沢山のロッカが面白い位にいくつも並ぶ。上と下の二段に分かれているが、下の段は見るからに使いづらそうだ。自分が上の段でよかったと心底思いながら、仕事を終えた私は軽い着替えをすませ

ようとしていた。

私がこの仕事を始めてから約一年。

ただのレジ打ちである事には変わりはないが、特に不満はない。もしかしたら自分の仕事はこのままレジ打ちで終わるかもしれない。そこら辺にあるようなスーパーに勤め、そこら辺にいるようなフリーターにまぎれ、そこら辺にありそうな人生を送る。目的なく生きてる自分を認識するものの、矯正しようなどとも思わない。自分の人生はきつとこのまま音沙汰もなく終わる事だろう。そう思う。

(…そんなもん、だよな)

そう思うと、自然に心が苦^にくなるのはなぜだろう。

心に味覚など存在するはずもないのに。

「何変な顔してんだ？」

「え？」

気がつくと、そこには何と賢太がいた。ロッカーの戸の裏に掛けている、顔くらいしか映らない鏡の中に。

こいつは鏡なら何でもいいのか？

私はあきれながらもロッカーを触れる手に力を入れる。

バンッ

閉まるロッカーの内側で、中にかけてあった鏡が落ちたのか、ゴトンという音がした。一番近くにいたパートのおばさんが、不信な目で私を見ている。

はぁ、と私はため息をついた。

先ほどの人生の話だが、“音沙汰もない”という言葉はなかった事にしよう。なぜなら、賢太という存在が、今さっきも私の目の前にあった時点で、私の平凡な人生は全くの“非現実的な人生”へ変わってしまったているのだから。

理由

『お前にいい場所教えてやるよ』

そう言えば、あの職場を勧めてきたのは賢太だっけ。良い場所だから、とか言って。確かに悪くはないが、あれくらいの職場なら他にもいくらでもあるではないか。何がいい場所なんだか。あいつの“良い”の基準は一体何なんだろう。

「え？」

考え事をしながら自分の家の郵便ポストへ手を伸ばした私は、予想にもしていなかった光景に一瞬どんな反応をしていいかわからなくなつた。だが、それは一瞬のことでは無く、開け放たれたポストの内部から放たれる異臭は、あとという間に私の顔をゆがませる。

「くっさあ、……………何これ」

何これも何も、それは誰がどう見ても変哲のないただの生ゴミだ。異臭を放つそれは私の鼻を氣遣おうともしない。

誰がこんな。

漠然とした疑問しか頭には浮かばなかった。

放っておくわけにもいかず、自分のポストに入っていたという事は、これは自分のものだと判断されるのだろうと思つた私は、中に入っていたもののすべてを自宅へと持ち帰つた。生ゴミの下敷きにされた広告類は全てぐしゃぐしゃで、数少ない私宛の郵便物もまぬがれることはできなかつたらしい。無事だったとしても、特に目を通そうと思うものもないのだが。

「あれ？」

良く見れば、一枚だけ生ゴミの湿気にやられていない新品の紙があった。私はそれを手に取ると、近くに感じた好奇心の視線に答え

て内容を口にする。

「・・・・・・・・ぶす」

沈黙が訪れる。私は呆れて目を細めた。そして近くからも呆れたような溜息。

「なんだよそれ。しょうもない悪戯」

好奇心の視線はやはり賢太だった。あいつときたら、三面鏡の中でゆったりとくつろいでいる。私はさらに呆れた。呆れすぎて、手に持っていた紙は、力の抜けた私の手からはらりと床へ滑り落ちた。「本当。しょうもない悪戯」

しょうもなさすぎて力も入らない。

「お、珍しいじゃん。明希が俺に賛同するんて」

こいつもこいつだ。緊張感というものを知らない。

「こんな馬鹿な事、あんた以外にする奴いたんだ」

「おまえなあ」

情けないともいえる賢太の声に、私は小さく笑って見せた。

「なあ、悪戯はこれが初めてだったのか？」

「いや、これは初めて」

「は？これは？」

「あ、いや…」

「言えよ」

「実はさ、小さい悪戯がここんとこ続いてたんだよね」

「ここんとこって？」

「んー…。三ヶ月と、そこそこ？」

「は！？そんなにか！？」

「そんな長くないでしょ。だいたい悪戯が小さすぎて、あまり気にとめてなかったのよ」

「図太い神経。悪戯してる方に同情」

「うるさい」

私は先ほどの生ゴミとぐしょぐしょの広告類郵便類を片づけなが

ら、適当に賢太の話に付き合っていた。適当といっても、言っている事に嘘はないし、別に邪険に扱っているわけでもない。どちらかというと、私は口を動かしながらの方が手も動く方なので、今の状況にありがたいといっちゃありがたいのだが。まあ、受け答えに面倒くさいとは思わない、と言ったら嘘になる。というか、何もかもが面倒くさかった。こんな鼻に悪い仕事、さっさと終わらせるか後回しにするかをして、早く体を休めたい。それが今の本心だ。

「よし！」

一日の疲労がたまりに溜まってノックダウンしそうなわたしの耳に、あいつの妙に元気で跳ね上がるような声が飛び込んできた。

賢太は何かを思い付いたかのように、鏡の中の台を叩く音が私へ届く。

一体どんな面倒事を提案する気なのだろう。つかれて瞼の重い目を三面鏡へと向けると、子供のように瞳を輝かすあいつの姿。

きつとろくな話じゃない。

そんな私の予想は見事に当たり、あいつは恐ろしい事を楽しげに口にしたのだ。

「なあ！犯人捕まえようぜ！」

もう何をどう言ってもやればいいかわからない。

眠い。とりあえず今の私は眠いのだ。

賢太の言葉を軽くスルーし、私は欠伸をして立ち上がった。

今日は何て一日だったのだろう。こんなに激しい感情の高ぶりは久々だった。感情というものがこんなに疲れるものだったとは知らなかった。もしくは忘れていた。おかしい感覚だ。いつもぼーっとしているわけではないのに。今先ほど、とても嫌な思いをしたはずなのに、久々に喚き散らしたせいか、頭がすーっとしてすっきりしたような感じがした。いつもより視界がクリアになり、物音もよく聞こえるような。

なんでだろう。

人間というのは矛盾だらけで難しいなと思った。

「じゃあ任せるから、」

「どこいくんだ？」

「お、ふ、ろ」

「鏡あるか？」

「覗くなバカ！」

私はちようどよく足もとに転がっていた新聞紙を拾い上げ、思いつきりあの馬鹿ずらへと投げてやった。

その後風呂から上がった私は髪を乾かすのも忘れ、ぐっすりと夢の世界へと落ちたのだった。

あれから一週間。賢太はまだ鏡にいる。

「あんた死んだ事忘れてない？」
「忘れた」

明希は三面鏡の右の鏡へ向きを変えた。そこにはちゃんと自分がある。

「なあ、その化粧変えたら？」

横から（？）声が掛かる。

「地味っていうかなんていうかさ…。もう少し明るめのにしたら？」

「うるさい。あんたこそ死人らしくしてれば」

「あ。明希は首の折れた俺に会いたかったの？」

「…」

そういえばこいつ、階段から落ちて死んだんだっけ。

何とも呆気ない死に方だ。

「私もつまんない死に方すんのかな」

少なくとも立派な死に方はしない筈だ。ん？立派な死に方ってなんだ？

ちらりと賢太と目が合った。

「ばーか」

賢太が三面鏡から消えた。消えたというか、鏡の中を歩いてどこか行った。

怒った？

さすがに死人に死に方の話は無神経だったろうか。明希は時計を確認し、仕事へ向かった。

何で自分はここにいるのだろう。

あの日の朝、気付いたら鏡の中にいた。
以前明希に

「この鏡絶対何か憑いてる」

と言ったのは自分だったか。まさか自分が憑くはめになるとは。

賢太は鏡の中を移動しながら考えた。

どうやら自分は明希から一定の距離しか離れられないらしい。
明希について、何か心残りでもあったのだろうか。思い出せない。

明希とはなんだかんだでよく一緒に暇潰しをしたっけ。ぐだぐだした空気が居心地よくて、自分から誘う事もあった。

恋愛感情は全くなく、ただ目的が無い者同士、忙しそうな社会人をぼーっと眺めていた。

そういえば、明希にあの職場を勧めたのは自分だったけ。

確かあの時、すごく興奮していた気がする。

あれ、

「何で俺、あそこ勧めたんだっけ」

明希はいつも通り仕事を終わらせる。

ロッカールームの着替えの時、いつも賢太がいた鏡を見る。

今日はいないのか。

あれから一週間。

自分の生活に、賢太は普通に馴染んでいる。鏡をみる目的が変わった気がする。

（でも、）

これは異常な事なのだ。賢太はいつか行くべき場所に帰らなければならぬ。

（あの馬鹿は、）

なぜこんな事を起こせられるのか。

「あれ？」

ローファーから普段の運動靴に履き替えようとした時だ。持ち上げた運動靴からカラカラと音がした。

試しに逆さにする。

「…。」

がびようが二つ。

いつの時代だ。

「あれ、またいじめ？」

「…」

こいつ。

「あんたがここに居れば犯人判ったかもよ!？」

「あゝっ!畜生!！」

まったく。

「なあ、」

賢太が尋ねる。

「ん？」

「今日は何があった？」

嫌がらせの事だろう。

「朝のイタ電。ピンポンダッシュ。がびよう。生ゴミ。ポスト荒らし。イタ電。」

「そっか」

明希は特に気にしてないのだろうか。

「なあ、」

また賢太が尋ねる。

「ん？」

「…あれ？…なんだっけ」

「どうしたの」

「いや、何か大切な事訊こうと思った気が…。…なんだっけ？」

「知らない」

ガシャーン

え？

突如我が家に飛び込んで来た騒音。

窓ガラスを突き破り、拳位の石が投げ込まれてた。石は紙に包

まれていた。その紙には――

『殺シテヤル』

「∴。」

「なになに？」

賢太は興味深々だ。

明希は素直に見せた。

「はあ!？」

賢太はすつとんきょんな声をあげた。

理由（後書き）

すみません！この話以降から修正していない状態になります。改行がおおく、描写が少ないのは携帯で投稿していた名残です。そのうち（いつ？）きっと直します！

実行

「風邪引いたみたいで。…はい、すいません。ありがとうございます」

明希は一息つく。

今日はずる休みだ。

「随分簡単だったじゃん。流石俺のお勧め」

「あたしの日々の賜物！」

さて。殺すと言われたらこちらにも動かない訳にはいかない。

「行く？」

「よっし！犯人探し！」

三面鏡の真ん中で賢太が拳を揚げる。

なんでこんなに楽しそうなんだろ。

左隣りへふと視線を移した。

明希は賢太がいる鏡の

すると鏡の中の自分と目が合う。

（あれ？）

目を見張る明希の視界に入ったのは、賢太の隣りの鏡に映る、楽しそうな自分。

（なんだ、——あたしもか。）

白昼堂々と街中を歩く。まあ当たり前か。自分は何も悪い事をしていないのだし。

平日の町はそんなに賑わってはいないが、静かと言える程でも無かった。

果たして、犯人は自分を見つけ出して居るだろうか。

気付けば、おしゃれなショーウィンドーの並ぶ通りに出ていた。自分には場違いな気がして明希は踵を返そうと足を引く。

「いーじゃん行こうよ」

間近から声がして、明希の心臓はドキリと飛び跳ねた。だがその耳に馴染んだ声が、すぐに賢太の物だと気付くと、なぜだ思った以上の安心感があった。

「こっちこっち」

明希が振り返ると、そこにもショーウィンドー。そしてそれに映る自分……ではない。

細身で自分より背が高くばさはさな髪。生前良く着ていたお気に入りの服に、悪戯っ子のような笑顔。

そこには等身大の賢太がいた。

「映る物なら何でも良いの？」

明希の呆れた言葉に、賢太はにっと笑った。

「今気付いた」

手鏡サイズでも三面鏡サイズでもない、等身大の賢太。彼は今もこうして生きてる。明希の頭にそんな錯覚が過ぎった。だが、彼女は自分の胸に不自然に浮き上がる“現実”をしっかりと受け止めた。明希は苦笑する。

本当に生きていたら、このばかりの手を握って居たかもしれない。

待ち伏せ

並んで二人で歩くのは何年ぶりだろう。

ああ、そうだ。まだ半年しかたってないんだ。

賢太が死んで…。

「なあなあ」

まるで子供が袖を引く様な呼び止めに、明希は弾かれた用に顔をあげた。

「ん？」

「これ買えよ」

「は？」

そこには淡いピンクの口紅。どうやら化粧品店のショーウィンドーらしい。

こんな明るい色、自分に合うだろうか。

「良いと思うよ？」

賢太は勧めるが、明希は迷う。

本当に合うだろうか。自分には明る過ぎる気がする。

明希は

「また今度ね」

と、その場を足早に過ぎようとした。賢太が何かを言って居るが、

どうせ口紅の事だろうと耳を貸そうともしない。

「おい、明希！」

またコイツは。どうしてこんなにしつこいだろ。

「明希！」

声が響く。突如内側に感じた、中心を引っ張られるようなおかしい感覚。

「危ない！」

声に反応して呆然と上を見る。

びゅっ

自分の左耳に風邪を切る音。続いて足下で何が碎けるごっという低い音。

「レンガだ」

賢太は見たままを言った。その言葉を、どこか遠くで自分は聞いて居る。もしもあのまま賢太の声に反応せず足を進めだしていたら、何かに引っ張られていなかったら？

明希は自分の心臓に触れるように、胸元の服をそっと撫でた。

やっと実感したのだ。自分が命を狙われているという事を。

そう実感すると、明希の中の何かはふっと静かになった。頭が冷めたと言ってもいいかもしれない。

彼女はそこを素通りする。そのまま平静を装って歩き続ける。

果たしてこれは装いなのか、それとも本当に平静なのか。自分でもわからない。だが、頭の中は麻痺したように、全く、騒いだり逆上したりをしようとしては確かだ。

ショーウィンドーが切れたり続いたりする度に、隣りを歩く賢太も消えたり現れたりする。他の人間は賢太の存在に気付いていない。もちろん犯人も。

冷めた自分が、きよろきよろしないようまわりを伺う。

しばらく何も起こらないで、ただ沈黙の状態が続いていた。

ショーウィンドーには目もくれず、明希はただ進行方向だけを目に映した。

そういえば、この先に使われて無いビルがあったつけ。

静かに頭に浮かんだ廃ビルに、一瞬何かをためらう。

「明希、どうした？」

知らず知らずのうちに歩調が早くなっている事に気付き、賢太はガラスの外を歩く明希へ怪訝な声を投げた。

だがそれに返って来たのは

「いいから」

といった心なしかトーンの低い短い言葉。

ビルに近付くに連れて、明希の心臓は鼓動を増した。

そしてあつというまにビルに着くと、今までに無いくらい落ち着いていた自分がいた。

所々ひびの入った外装。中に入ると壁と階段と窓、誰かがたむろったであろう潰れた発泡酒の缶などが目に入る。余計な物は一切無かった。

鏡が見当たらない事が少し残念だ。

明希は入口から入ってすぐ横に、壁に張り付く様に待機した。

ここで待ち伏せをするのだ。

寺島さん

入口の外に人の気配。それはなかなか動こうとしなかった。たまに、中に入るか迷ったように、じやりっという音が聞こえた。

明希も迷う。今出れば、犯人の不意を突けるかもしれない。

しばらくして、犯人が先に折れた。

明希の横からためらいがちに人が現れ、ビルの中に足を踏み入れる。犯人が入口と部屋の中央の間で止まる。

犯人は入口横、自分の斜め後ろに居る、壁に張り付いた明希に気付いて無かった。

犯人も少々動揺しているのだろう。

そう。この若い犯人だって動揺くらい：

この若い犯人…？

「・・・」

明希は言葉を失い、目を見開いた。

自分の斜め前にいる犯人。見知った後ろ姿。

(…寺島さん、？)

そう。知り合いだ。職場で週に4回会う程度だが。高2のバイトの子。

なぜ彼女が？

明希が呆然としてみると、彼女はようやく自分の存在に気が付いた。目が合い、時間が止まる。

そしてまた、先に動いたのは犯人だった。

寺島は入口横に明希が居る事にためらい、外へでは無くビルの奥へと逃げた。明希はなぜ自分は今こうも反応が遅いのかと舌を打つ。

寺島は階段を上へと駆けて行く。

明希はそれをおった。

「明希！」

階段を上っていると賢太に呼ばれた。一体何処からと、走りながら周りに目をやる。

なるほど。階と階の間にある踊り場に長方形の鏡が貼り付けてあった。

明希は賢太が居る事に内心ほっとする。当たり前だ。一人より二人仲間が居る事はとても心強い。

「あいつ、犯人。このまま行けば追い込められるよ！」

踊り場から投げ掛けられる賢太の声。

「このまま行けば屋上しかない！屋上のドアは針金で止めてあったから！大丈夫！追いつける」

明希はぜいぜい言いながら階段を上がった。途中で軽く足を止めるが、すぐに走り出す。

訊かなければ。なぜ自分に嫌がらせなどするのか。しっかり説明して貰わなければ。

「はあ…はあ…」

ガシャン、ガシャン

ドアノブを乱暴に扱う音。

「寺島、…さん！」

「——！」

音が消える。

屋上のドアの前で、針金を懸命に解こうと苛立っていた肩が落ちた。

なんで？

「寺島さんよね？」

明希が踊り場から声をかける。階段に足を踏みかけ、止まる。

寺島が涙目で振り向いたのだ。

泣きたいのはあたしだ！

明希は相手を刺激しないよう、慎重に言葉を発しようとした。

「どうし…」

「なんで！」

明希の言葉は遮られる。

目の前の少女からは涙が流れている。

明希はためらった。相手は自分を狙った犯人なのだ。涙なんて気にする必要無い。

だが

「なんで私ばかり！」

少女の悲しそうな表情。悔しそうな表情。

「おかしい！あなたみたいに、夢なんてなさそうな、ただ生きてるだけの人間が、いるのに！なんで私が！！」

寺島の涙混じりの声。

「あなたみたいに、いてもいなくてもいいような、…そんな人間がいるのに！」

ひどい言われようだな。

明希はそう思ったが、返せる言葉がない。

「あなたなんて、きっと死んでも、だれも、悲しまないのに！…なんで、…なんで」

明希はもう何がなんだか判らなかった。

自分の適当な生き方が責められている。だから自分が嫌がらせを受けたと言っても言うのだろうか。

「知ってる」

賢太の声に明希は振り向く。

踊り場の鏡の中の賢太は、鏡の中の自分の場所から少女を見ていた。「俺、明希が仕事してる時とか暇でさ。店の中とか、うろうろしてたんだ。その時、この子のロッカーの中。扉裏に付いた鏡を通った気がする。」

賢太は同情するようなめで寺島を見た。

「ロッカーの中がぐしゃぐしゃになって、『汚い奴だなー』って呆れた。でも、違ったんだ」

寺島には賢太の声が聞えない。ただ俯いて涙を流す。

「あなたみたいながいるのに……あなたがやられればよかったのに……」

と、言葉を漏らしている。

「あの子のスクールバックが開けられてて、ノートとか、筆箱とか見えたんだ。死ねとか、ぶすとか。この子も明希みたいに苛められてるのかーって。そのまま通り過ぎたんだ」

明希は賢太を見て、寺島を見た。

少女は泣きながらうつぶんを明希に投げつけていた。

明希は階段を一步上がる。

「寺島さん。バイトで苛められてたの？」

少女はびくりと肩を震わす。

明希はまた一段階段を上がる。

「だから、いてもいなくても同じ様なあたしに、八当たりしたかったの？」

少女を責める言葉ではない。自分が苛められても良い位置に居るのは、明希も判ってる。

「だけど、人を殺すのはいけないと思う」

また一段。

「来るな！」

少女は泣きながら叫んだ。

「うるさい！あんたなんか言われたくない！今まで頑張った事なんて無いくせに！！私は、私はずっと耐えてきたんだ！なのに！」
また一段。

明希は黙って上がる。頑張った事がないと言う言葉に、何も返せないから。

「私は頑張ったんだ！あいつらにも、学校の奴等にも！はっきり自分の意思を言ってやったのに！」

学校でも。

明希は心が痛くなった。

また一段、上がる。

「ずっと、ずっと耐えて、なのに、…なのに、」

明希は思う。

誰か一人でも助けてくれる人は居なかったのだろうか。

「親は？先生は？友達は？」

何もしてくれなかったのか。

この質問に、少女の肩が震えた。

俯いて。喚き散らすとは違う、抑えた声を出す。

「あいつら、…いたんだ…私にだって、…ずっと、ずっと。」

少女は俯いたまま涙を流す。乾いたビルの床。むき出しのコンクリートに、黒い染みができる。

「だから、親にも心配かけないよう、…耐えてこれた。なのに…よくも…、あいつら…よくも……」

ひくひくと肩を震わす少女。

明希は一段一段少女に近付き、手を伸ばした。

「あき…だ！」

賢太の声が階段下の踊り場から聞こえた。だが何と言ってるのか判

らなかった。

明希は手を伸ばす。

少女は顔を上げた。涙でぐしょぐしょに濡れた顔。赤くなった目が、自分をかたきのように睨みつけた。

(え?)

「よくも…あいつら…裏切りやがって!!!!!!」

どんっ

少女の両手が明希を押した。

明希の少女へ伸ばした手は空を掻く。

足が階段から離れた。

スローモーションで身体が傾く。

「明希!」

賢太の声。

視界にあるのは何も掴めなかった自分の手。

(ほらね)

やっぱりだ。

自分もつまらない死に方をする。

『あなたなんて、きっと死んでも、だれも、悲しまない』
甦る少女の声。

なぜか切ない。

何も出来なかった自分が、悔しい。

出来なかった。

違う。

しなかったのだ。

私が見たのは近付いて来るコンクリート。

それはとても暗くて、冷たそうで、悲しい悲しい灰色――

後悔

「明希ー！！！！」

駄目だ！

折角戻って来たのに。大切な事を教えに、自分は戻って来たのに。彼女は自分と同じ死に方をしてはいけない。

死んだりしたら許さない。

賢太の伸ばした両手が、鏡から出た気がした。半透明だがしっかりしたそれは、明希の身体に触れ――

だんっ

コンクリートの床に、人の身体が打ち付けられてる音。

なんでだ。

今一瞬だが、彼女の体重を感じる事が出来たのに。なぜだ。

賢太は鏡の中で床を殴った。

階段の上の少女は、力なくへたりこむ。

涙を流しながら、下にある明希を見る。

(怖い)

少女はぞわりと背筋を這う物を感じ、その場から駆け出した。

「待て！！！！おい！ふざけんな！！待てよ！！！！」

賢太の声は届かない。

自分はこんな事を見るために戻って来たのではない。

神様という存在を信じた事はなかったが、この世に戻ってこれた奇跡を少し感謝したのに。

賢太は目の前に横たわる明希を見た。

もしかしたら、自分をこの世に戻した奴はこれを見せつけたかったのかもしれない。

お前らのように目的無く生きてる人間は、こうしたつまらない死に方がお似合いだと。

「ちくしょ…」

賢太は誰ともなく、実体のない何かを恨んだ。

どうしたらいいのだろう。

何をしろというのだろう。

「明希……起きろよ…ばか」

賢太は子供のように体育座りをし、腕の中に顔を埋めて呟いた。

何かの気配。

気のせいかもしれない。本当に気のせいだった時のショックを考えると、とても確かめる気にはなれない。

賢太はためらう。

だがやはり小さな希望を手放しきれず顔をあげた。

「あき…？」

仰向けの身体はじっと動かない。

「…なんだよ…ばか」

また俯き、目を閉じる。

「あんたが言うな」

「わっ」

賢太はびっくりして後ろに手をつく。

明希は痛そうに顔を歪め、賢太の方へ首を向けていた。

「おまえ、生きて、る？」

明希はにっと笑った。そしてやはり身体が痛いのか、顔を歪める。

「なんか、床に近付いた所で一瞬身体が止まった」

賢太は自分の手を見た。

一瞬。たった一瞬だが。確かに自分は触れる事が出来たのだ。確かに彼女を受け止めたのだ。

「ありがとね」

明希は寝っ転がったまま、鏡の中の賢太へ石を投げた。
カチリと石が鏡を叩く。

ひみつ

「開いた」

「よっしゃー！」

明希はドアの針金を外し、ビルの屋上へ出た。
外は鮮やかなオレンジだった。

「おー」

賢太がわざとらしい声を漏らす。

明希は床に座り、隣りに100均の鏡を置いた。

「きれいだな」

「うん。…生きてて良かった」

「だろ？」

賢太の得意な声に、明希はちくりと胸に痛みを感じた。
死んでいる賢太に、こんな事を言ってはいけない気がする。

「………」

明希は黙り込んだ。

賢太はそんな明希にちらりと目をやり、沈み行くオレンジへ目を戻す。

「俺さ、思い出したんだ」

オレンジの沈黙にぼとりと落とした言葉。

明希はその言葉を、しっかりと拾ってくれた。

「何を？」

「ここに居る理由」

「教えて」

「ひっみつっ♪」

「ばっかっ」

はははっ賢太が笑い小さく続けた。

「でもさ、」

明希は鏡に反射した光に目を細めながら賢太を見た。賢太は子供っ

ばい笑いを浮かべている。

「明日早起したら教えてやるよ」

「何時頃？」

「んー、4時とか」

「早っ」

「出来ないべ？」

「絶対やる」

二人の表情はどこか楽しそうだ。

気付くと日はもう沈んでいた。

「帰ろうか」

明希がきりだし、

「うん」

と賢太が頷く。

「…買おっかな」

「は？」

「あんたが言ってた口紅…買おっかな、」

なぜか明希はむすつと言った。

「お前、」

賢太は言葉を切る。

「なに？」

「変なトコでシャイだよな。ウケる」

ぴしゃり

鏡が閉じられた。

帰りは行きに通ったショーウィンドーの通りを歩いた。

賢太は楽しそうにガラスの中から店を覗いていた。

「おっ！これこれ」

例の店の前で二人は足を止める。正しくは明希一人だが。お洒落な空気が外装からも伝わる。

どうしようかとためらう明希を、賢太が茶化しながら背中を押した。

二人は無事に目的の物を購入し、店を出た。

ピピピピピピ：

「おっきろ〜」

ピピピピピピ：

「朝ー」

ピピピピピピ：

「あーさーだーぞー！」
ぼふっ

「うわっ」

明希の枕が三面鏡へ飛んだ。
ピピピピピピ：

「お前、俺より先に目覚し止めろよ！」

「あんたの方がうっさい」

目を擦りながらトイレへ行き、洗面台へ向かう。
手に水をすくい、ふと顔をあげる。

賢太。

「うわっ、ぶっさいく〜」

バシヤン

明希は洗面台の鏡に水をかけ顔を洗った。

「ちゃんと起きたなー」

「当たり前でしょ」

賢太は鏡ごしに居る明希を見た。

「孫にも衣装？」

「難しい言葉良く使えました〜」

昨日買った口紅をつけた明希が、子供を褒める様に賢太を褒めた。

「なんだよ照れちゃって」

賢太は膨れて言った。

二人は朝早くから電車に乗った。

日も出ていないというのに人が居る。これから会社に向かうであろうサラリーマンやスーツを着た女性。女子高生。

こんな時間からよく皆頑張るなと思うと、明希の心を何かがつついた。

早朝

「その道真っ直ぐね」

賢太の声に案内されながら明希は辺りを見回す。

「心配すんなって。もしお前が迷ったらしっぴかり俺が案内してやるからさ！」

賢太の冗談を軽く耳に入れながら、明希は辺りの景色から目を離さない。

迷う？

まさか自分が？

迷いたくても迷える筈がない。
だってここは

「はい到っちゃーく♪」

「…ここ」

「俺が明希に紹介した職場ね」

ここに一体何の用が？

「いいから来いよ。てか行って」

明希は賢太に言われるまま屋上へ向かった。鍵がかけられた戸の前。
明希は目を据わらせた。

「出れないけど」

「だろ？」

ここに連れて来といて何だそれは。

明希は鏡を割ってやろうかという衝動に駆られる。

「あ、あそこあそこ！」

賢太が指差す方を見ると、地面に接して小窓があった。

（まさか）

「そっから出れるよ」

（やっぱり）

腹這いになり、服を汚しながら明希は外へ出た。
まだ暗い街が電灯で照らされているのが見える。
明希は賢太の指示する場所に腰掛けた。

「俺さあ」

賢太がこぼす。

「死ぬ時かなり後悔したんだ」

明希は隣りの鏡を見た。

初耳だ。

まあ死ぬ前に後悔しない人間の方が珍しいか。

「なんかさ。自分が居た跡っていうのが、何も無かったっていうかさ」

明希はその気持ちちが判る気がした。

「俺の居た場所なんて、簡単にかたされて、次の人間が来て、終わりだべ。そこに俺が居た事は皆忘れる。その時点で、完璧に俺は消える」

明希は俯いて、それを聞いて居た。

「俺さ、見つけたんだ。やりたい事」

明希は目を見張る。

賢太からその言葉を聴きたく無かった。

羨ましいとか、抜け駆けとか、そんな事では無く。

痛い。

心が傷んだ。もし賢太が生きていたなら、自分はどう言葉を返したのだろう。

軽い対応で返せたかもしれない。笑い飛ばせたかもしれない。

だが、賢太はもう

死んでるのだ

やりたいを事見つけた。叶わない願い。消えてしまった賢太の将来。
ただ心が痛い。

なぜ賢太が死ななければならなかったのか。
なぜ偶然に賢太の将来を奪ってしまったのか。

ただ哀しい。

なぜ夢のない自分が生きているのか。
なぜ夢のある者が死ぬのか。

痛い。
胸が痛い。

「明希？」
賢太の声。

いつもへらへらして、いい歳して子供みたいで。

痛い。
痛いよ。

「お、おい、泣くなよ」
柄にも無く慌てて。

人の心配なんかして。
判ってんの？あんだ、もう、死んでんだよ。

(馬鹿、馬鹿、馬鹿…)
明希は哀しくて涙が出た。止まらない。

嫌がらせを受けても、殺されかけても、ずっと泣く事が無かったの

に。

そう。半年前だって。

賢太が死んで、葬式にもいって、花も添えて、線香もあげた。

自分は賢太の死を何とも思っていなかった。

なのに、何で今更。

賢太を恨む。

自分に涙を思い出させた賢太を恨む。

生きてる歓びを思い出させた、賢太を恨む。

空が明ける

「…明希い」

苛められた子供の様に、賢太。

そして表情をぱっと変え、ある方を見た。

「見ろよ」

明希は下を向いている。

「見ろよ！お前、これ見なかったら呪うぞ！」

（冗談になってないよ）

明希は涙でぼやけた視界をあげた。

眩しい

「涙、拭けよ。ちゃんと見ろ」

明希は袖で乱暴に拭く。

そして視界に入ったのは――

昇る日。

ビルの間から洩れる光。まるでビルに押さえ付けられた光が、それに抵抗してビルを押し返すかの様に、強い光がビルの輪郭を覆っていく。

賢太の様だと思う。自分の死から逃げず、自分らしく自分の前に存在してる。

そして寺島という少女を思う。周りから押さえ付けられ、耐えて、耐えて、折れてしまった少女。

光は広がる。

街を照らす。

遠くに、賢太と歩いたお洒落なショーウィンドーの通りが見えた。

ショーウィンドーが光を反射し、通りが輝く。

高いビルが光に吞まれる。

街灯という存在が消える。

明希と賢太を強制する事なく、押さえ付けること無く、透明な空気の様に照らしてく。

「…俺、ここを偶然見つけて。…その日は凄い暇でさ。…夜眠れなくて。…ここ来て」

明希は賢太を見ようとしたが、鏡の反射する光に遮られた。

「俺、ここから同じ様に朝日を見たんだ。あの時と違う光、違う空だけど、やっぱりきれいだと思う」

見えない。賢太が見えない。

「ここで、こんな景色を沢山見たいと思ったんだ。小さい時の、カメラマンの夢を思い出したんだ。やりたい事、見つけたんだ」

明希は目を細める。

鏡の光は、反射光か、賢太が発する物か。

「それで、明希に見せようと思った。連れて来て、明希にも夢をあげようと思った。見つける手伝いをしようと思った」

落ち着いて来た反射光の中で、賢太の複雑な笑顔が見えた。

「そしたら俺…。明希にここを勧めて。それから自分も何とかバイトで金稼いで。自分の稼いだ金で、カメラ買って、ここで明希を撮ろうと思ったんだ。明希が夢を見つけた時、記念に一枚目を撮ってやろうと、思ってた。なのに…」

泣きそうな笑い。なぜこいつは笑おうとするのか。

「金が貯まって、俺凄い興奮して…まだ、……………まだ間に合うと思ったんだ。…俺の……………夢も、……………明希の、夢も、……………思ってたのに……………」

明希は涙を流した。

俯いてではなく、しっかり前を見て。

自分達を照らす朝日を見て、涙を流した。

「明希。…俺、お前が羨ましいよ」
うん。

私はまだ、生きてる。まだ、…まだ、

「……間に、合う」

賢太に感謝した。

涙を思い出させてくれてありがとう。

賢太に感謝した。

生きてる歓びを思い出させてくれてありがとう。教えてくれてありがとう。

「明希」

賢太の笑顔。

「ありがとな」

なぜお前がお礼を言うのか。

明希は泣きながら笑った。

「帰ろうぜ。早起きして眠い」

ははは。

こいつはほんとに。

どこまでマイペースなのだろう。

「うん。かえろ」

明希は鏡を持ちあげた。

感謝の気持ちを込め、いつもより丁寧に。多分中の人間は気付かないだろうが。

約束

明希はベッドの上で、天井をぼんやり見つめながら呟やいた。

「賢太、居る？」

「ん？ ああ」

三面鏡から声が返る。

目をつむってしまえば、何も見えず何も感じない室内。自分の存在すら薄く感じるこの部屋で、明希は自分以外のもう一人の存在を確認した。

「なんだよ？ まさかもう居なくなっと思った？」

軽く笑ったような声色に、明希はむすりと答える。

「うん。あんたが静かになるなんてあり得ないから」

実際にそうだ。彼はいつ消えても間違いのない存在。

だって、実際にはもう消えている存在だから。

「は？ …あ！ もしかして沈黙が寂しいのか？ じゃあ俺が子守歌でも、

」

「うっさい！」

「まだ歌ってねーよ！」

明希が三面鏡を見ると、賢太が唇を尖らせて笑っていた。

目が合い、明希からそらす。

「心配すんなって。俺はまだまだここに居るって」

お前をからかってやんないといけないんだからさ、という言葉に、

明希は顔を上げないまま「ばか」と呟く。

言わなければ。

言わないといけない。

（…言わなきゃ）

何かが明希の心を揺さぶっていた。なにか。あの明ける空を目にしてから、あの充ち溢れてゆく光の波を肌で感じてから、なにかがずっと、彼女をせかしていた。

はやく。ハヤク。速く。早く・・・

「カメラマン」

時間になるとほんの少しでしかない。賢太が唇を尖らせて、笑って、それからほんの数秒の沈黙だ。その数秒の沈黙に、沈黙と呼ぶにも時間的に「沈黙」という言葉が当てはまらないのではないかと思う少ない時間の幅に、部屋へずけずけと放たれたのは明希のむすつとした声だった。

「は？」

賢太はあまりに突然すぎる単語に目を丸くした。

明希は変わらず、天井を見つめる。

「カメラマンになりたい」

そう言うのと、天井に向けられた視線が一瞬賢太へと向けられ、眼があつたかと思うとサッと反対側の壁へ顔をそむけた。

賢太からは彼女の表情が見えなくなってしまうたが、だが確かに彼女の今の心境がわかった。それはもう確実に。子供のようにわかりやすい彼女のその動作から。

察するに、彼女はいま、恥ずかしがっているのだ。

今まで自分の夢を他人に話したことはなかっただろうから。どちらかというと、汗を流して必死に働いてる人間を指差し、「なんであんなに頑張ってるのか」と、訊く様な人間だったから。

そういえば、彼女から将来についての話を聞くのは初めてかもしれない。それもカメラマンだなんて、こんなあからさまに「夢」という単語がお似合いな言葉を彼女の口から聞いたのは本当に初めてだ。

恥ずかしさを隠した正直なその言い方に賢太は笑った。

「俺と一緒だな」

「：うん」

明希は気まずそうに頷く。

「良いんじゃないのーの」

鏡の中の彼は、いつもになくやわらかい声音だった。

「その代わり今から死ぬ程がねーと。絶対難しいよな」

絶対なれるよ、とか無責任な事は言わない。今の彼女の状況から、正直な意見を正直に述べる。「死ぬ程」という言葉を強調し、今までの時間のロスを相手の耳へ、頭へ、刻みつけて。

明希はそんな賢太の対応に感謝した。

「ありがとう」

照れながらも、賢太の目を見て。

「照れんなって」

賢太はそんな明希をからかう。

ぼふっ

枕が飛んだ。もちろん明希から放たれたものだ。

そして鏡のなか賢太は笑う。

明日は仕事行かなきゃな。と明希が呟き、お前って意外に真面目だよな。と賢太が言った気がした。賢太が子守歌を歌い出して、明希は初めて聞く賢太の歌にくすぐったくなり、うるさいと言った気がした。賢太はそんな明希を鏡の中からかって、明希はもちろん反論して：

＊

目を覚ました。

ベッドの上。

見慣れた天井。

静かな室内。

「――」

私はがばりと身を起こし、三面鏡に目をやった。

それは、なぜか、いつの間にか癖となっていた朝の日課。朝起きたら、まずはじめに三面鏡を見て、おはようと言っていた。今思えばとても不自然な日課。

（なんでだろう）

あんな不自然な日課を、自分は疑問も持たず受け入れていた。

それが当たり前だと思っていたからこそ気付かなかった非現実的な現実。

私がそこに見たのはいつもの三面鏡だった。

そう。ちゃんと自分が映る三面鏡だ。

そこには自分以外にも存在しないし、誰もいない。

別に、これは普通のことじゃないか。私は自分にそう言い聞かせ、ベッドから立上がり洗面台へ向かった。

寝不足なのか、どことなくかさついた顔。それに思いつきり水をかけてやり、視線を上げれば鏡。

そこには自分がいた。

もちろん当り前な事だ。

何も変わっていない。そう。なにも。

これが現実。

そこにはもう、自分しか居ない。どの鏡にも。

当り前の常識。

明希は、昨日テーブルの上に置きっ放しにした100均の手鏡に手を伸ばした。

バックに入れておかなければ、仕事に行く時忘れてしまいそうだし、仕事。

そういえばもう昼ではないか。明希は壁に掛けてある時計をみて、頭をがっとなぐらった。手に握ったままの手鏡が、頭に当たってごりっと言ったが、そんな事はない。

（連絡してない）

電話しなければ。咄嗟にそう思った。

菅原さんに電話しなきゃ。

あと、今日はもう休もうか。何でだか気が乗らない。何もする気にならない。

(なんでだろう)

切ない。

当たり前のはずの日常が、切ない。

明希は電話へ手を伸ばしながら、ちらりと視線を流した。静かな部屋の中、動こうとも喋ろうともしない三面鏡を見つめ続けた。

これが、『現実』。

頭に浮かんだ一つの言葉。その言葉を、突然電話の電子音がかき消した。

「もしもし」

『もしもし。菅原です』

菅原さんか、と明希は壁にもたれる。

今日は仕事を休もうか。今から行く気にはなれない。しかもこんな寝起きの顔で。

行きたくない。

明希は手の中の鏡を見た。ずっとこうして、あの鏡を眺めていたい。

行きたくない。

カタン

ゆるんだ手の力。そこから見慣れた手鏡が滑り落ちた。

「あ——」

『もしもし、山田さん?』

「あ、はい。すいません」

『今日は休む? 今から来るのもなんですよ?』

「い、いえ、あの、」

『山田さん?』

「行きます!今からでも、行きます。大丈夫です。」

『そう。…無理しないでね。待ってるから』

「はい。わざわざありがとうございます。ではまた後程」

ガチャ・・・ツ、ツ、ツ・・・

部屋はまた静かになった。

明希はたった一人の、当たり前前の部屋の中。電話を切ると、滑り落ちた手鏡を拾い上げ、そっとその表面を指でなぞった。

現実。

(まったくあいつは)

自然と笑みがこぼれる。それは少し泣きそうにも見える、今までにない微笑みだった。誰にも頼ろうとせず、心を預けようとしなかった明希には、はじめてのそのほほ笑み。

「『ん』だけ逆だったの。ばか…」

鏡の中から、鏡文字で書かれた字。外から見て読みやすいようにという、亡き友からの気遣い。

そう。

鏡の中には明るい色の口紅。

二人で買いに行った、あの――

『がんばれ』

今は亡き友。

だけど確かにここにいた。

今日も、明日も、仕事に行こう。勉強しよう。

私も少し、夢を追ってみようか。
あいつを見習って――

約束（後書き）

2006年10月頃作 そのうちちまちま直す予定。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3405b/>

鏡の中から君の背を押す

2010年11月10日14時27分発行